群教セ	G09 - 01
	平15.214集

積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる指導の工夫

── 英会話活動と教科との関連を図って ──

特別研修員　　須藤　千賀子　（富岡市立富岡小学校）

Ⅰ　主題設定の理由

21世紀を生きる児童にとって国際感覚を身に付けることはとても大切なことである。国際感覚とは文化や考え方の違いを認め、それらを互いに尊重しあい、自らも主体的に生きていこうとする資質である。将来、国際感覚をもった人間になることを期待し、その基礎となるコミュニケーションを積極的に図ろうとする態度を育成するための英会話活動を行うことは、大変意義あることと考える。ＡＬＴや地域に住む外国人とふれあう活動を進めていくことは、児童がコミュニケーションの楽しさや国際感覚を、体験を通して学ぶ大変よい機会となるはずである。「国際理解に関する学習の一環」としての英会話活動は、「総合的な学習の時間」のねらいである学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に取り組む態度を育てることにもつながると考える。

さて、新学習指導要領となり、国語科では「伝え合う力を高める」ことが目標に位置付けられ、「話すこと、聞くこと」の学習を系統的に学ぶ機会も増えた。社会科や「総合的な学習の時間」でも、インタビューや、発表の機会が増えたため、児童の「話す、聞く」力が向上してきていると感じる。しかし、児童の普段の生活からは、相手の言うことを聞かずに自己主張ばかりしたり、逆に言いたいことがうまく言えなかったりする様子が見られ、コミュニケーションをうまく図ろうという態度が十分に育っているとはいえない。これまでの授業でコミュニケーションの力を向上させたいと考え、いろいろな学習場面でも指導をしてきたが、教科相互での関連性を考慮しない計画であったため、まだ十分な成果が得られていないと考える。英会話活動では、「話す・聞く」活動が主となり、英語という今までに習ったことのない言語を用いるため、児童は興味をもって活動に取り組もうとする。こうした活動を教科学習と系統立てて行うことにより、コミュニケーションを図る態度も一層効果的に育成できるであろうと考える。

そこで本研究では、「楽しい体験活動」を展開しやすいといった英会話活動の特性を生かし、積極的にコミュニケーションが図れるような活動を工夫する。具体的には、友達と接したり会話をしたりする活動を、楽しみながら自然に行えるようなゲームの構成をする。また、クラスの共通話題である教科の既習事項を活動の題材として取り上げ、興味・関心を高める。ＡＬＴとのティームティーチングとなるため、国際理解につながるゲームや働きかけを活動の中に取り入れる。英語によるコミュニケーションの楽しさを味わうことによって、児童は人と積極的にコミュニケーションを図るようになり、国際感覚を身に付ける基盤にもつながると考える。

このように、教科との関連を図りながら英会話活動を行うことによって、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成できると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

英会話活動を教科と関連させて行えば、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育つことを実践を通して明らかにする。

III　研究の見通し

1　つかむ過程で、ゲームをしながら英会話に親しむ活動を教科に関連させて行えば、相手の言おうとしていることをよく聞き、英語を話してみようとするであろう。

2　追究する過程で、ゲームをしながら英会話を楽しく体験する活動を教科に関連させて行えば、体全体で表現する喜びを感じ、自分の話したいことを伝えようとするであろう。

3　広げる過程で、今まで学習したことをもとに、地域の外国人やＡＬＴと交流する活動を行えば、積極的にコミュニケーションを図ろうとするようになるであろう。

IV　研究の内容と方法

1　研究の内容

(1)　積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童について

コミュニケーションで最も大事なことは相手の言いたいことをよく聞こうとすること、自分の考えをきちんと伝えようとすることと考える。英語圏には自分の思いや考えを言葉できちんと伝えるという文化がある。児童は英会話活動を通して、コミュニケーションを大事にした英語表現にふれ、コミュニケーションの楽しさ、重要さに気付いていくことができる。また、小学生のころは、コミュニケーション活動で飾らずに自分の気持ちを話すことができる時期である。英会話活動でゲームを通して行う擬似コミュニケーションであっても、児童にとっては本当の気持ちを話す自己表現の機会であり、コミュニケーション体験となる。本研究では、このような英会話を楽しく行う活動を通じて人と進んでかかわろうとする態度、つまり「コミュニケーションを図ろうとする態度」を育成することをねらっている。具体的には次のような児童の育成を目指している。

○　教科で学習したことから、自分が調べたいもの、紹介したいものを選び、楽しくゲームをしながら英会話活動を行う中で、相手の言いたいことをよく聞き、英語を話そうとする児童。

○　教科で学習したことを英会話活動で楽しく体験したり、紹介したりする活動を行いながら、体で表現する喜びを感じたり、自分の話したいことを自分から伝えたりしようとする児童。

○　英会話活動で学習したことをもとに交流活動を体験し、コミュニケーションの楽しさ、いろいろな人と交流する楽しさを味わおうとする児童。

(2)　英会話活動と教科との関連について

小学校での英会話活動は、食べ物の名前を英語で覚えて言ったり、ゲームをしながら会話をするしたりするなどの活動が多く行われている。このような活動は楽しいが、教師が与えた題材で受け身的な授業となりやすく、児童が主体的にかかわっていくにはどうしたらよいかが課題となっている。そこで英会話活動を行うときに、教科で楽しく学習した内容から題材を取り上げれば、児童はより主体的に活動に取り組み、学習した内容もより深まると考える。ほぼ全教科を担任する小学校の教師であればこそ、各教科と関連付けて指導を行うことができ、児童の興味・関心を的確にとえることができる。また、児童にとっては既習の内容であるため、英語はよく分からなくても、ゲームをしたり、会話を楽しんだりするときにも自信をもって前向きに取り組むことができる。教科と関連した題材の選定のポイントとして①児童の関心が高かったものや児童が自信をもっているもの、②国際理解教育にかかわりが

深いもの、③一緒に楽しく体験できるもの等の中から英会話活動に取り入れやすいものを考えた。

(3)　英語によるゲームについて

小学校では楽しく英語を使って活動させたい。楽しみながら英語に親しみ、自然に声が出るようにすることが大切だと考える。そのような雰囲気の中でなら、コミュニケーションを自然に行うことができるであろう。そのためにゲームの内容を工夫する。つかむ過程では、心と体の緊張をほぐせるゲーム、自然に会話を繰り返せるようなゲームを取り入れる。また、外国の遊びをゲームに取り入れ、体験する。さらにそれを参考に自分たちのオリジナルゲームを考える。追究する過程では、興味を広げるためのゲーム、楽しい雰囲気で活動できるゲーム、会話が広がるようなゲームを行う。教科で学習した内容を実際に英語を使いながらゲームを通じてもう一度体験をしてみる。広げる過程では、習った英語を使い、地域の外国人（ゲストティーチャー）と自分たちが工夫したゲームで交流をする。教わったゲームから自分たちで考えたゲームへ発展させ、交流する中で、話そうという態度を大いに認め、会話の機会を多く作り、成就感を味わえるようにしていく。

2　研究の方法

(1)　授業実践計画

期　　間	平成15年10月～11月上旬　　８時間	単元名	話そう！遊ぼう！交流しよう！
対　　象	富岡市立富岡小学校　　４年３組　男子16名　女子15名　計31名		

(2)　抽出児童について

Ａ　男	学習にはまじめに取り組むが、自分の意見や思いをなかなか言葉に出せないため、繰り返し練習をしたり、声をかけたりして、英語を話そうという態度を認めながら支援する。
Ｂ　女	得意な体育や他教科では積極的に取り組む姿勢が見られるが、英会話の活動では消極的であるため、体育の題材を取り入れ、活動に取り組もうとする態度を認めながら支援する。

(3)　検証計画

検証項目	検証の観点	検証方法
見通し１	ゲームをしながら英会話に親しむ活動を、漢字を使う学習と関連させて行うことは、相手の言うことをよく聞き、英語を話してみようとするために有効であったか。	・観察（活動の様子） ・ふり返りカード（自己評価・相互評価） ・ビデオ撮影
見通し２	ゲームをしながら英会話を楽しく体験する活動を体育で学習した活動と関連させて行うことは、体全体で表現する喜びを感じ、自分の話したいことを伝えようとするために有効であったか。	・観察（活動の様子） ・ふり返りカード（自己評価・相互評価） ・ビデオ撮影
見通し３	今まで学習したことをもとに、地域の外国人やＡＬＴと漢字を使ったゲームや運動などを交え、楽しく交流する活動を行うことは、積極的にコミュニケーションを図ろうとするために有効であったか。	・観察（活動の様子） ・ふり返りカード（自己評価・相互評価） ・ビデオ撮影 ・参加者からのコメント

Ⅴ　研究の展開

1　単元の考察及び目標

単元の考察	本単元は、小学校４年生における国際理解に関する教育の一環としての英会話活動を取り入れた学習活動である。ゲームをしながら英会話を体験する活動を、児童が興味・関心をもちやすいよう教科と関連させ、楽しく行うことにより、コミュニケーションを図ろうとする態度が育成できると考え、本単元を設定した。
目　標	楽しくゲームをしながら英会話を体験する活動を教科で学習したことを題材にして行うことにより、英語に親しみ、積極的にコミュニケーションを図ろうとするようになる。

2　評価規準

評価規準	学習活動における具体的な評価規準
a 積極的にコミュニケーションを図ろうとしている。	①友達や先生方と楽しく活動しようとしている。 ②恥ずかしがらずに話そうとしている。 ③伝えたいことを話そうとしている。 ④ＡＬＴや外国から来た人と直接ふれあい、会話をしようとしている。
b 英語を聞こうとしている。	①英語を集中して聞こうとしている。 ②相手が言っていることを何とか理解しようとしている。
c 自分の考えや気持ちなどを英語や動きで伝えようとしている。	①まちがいを気にせず、声を出して英語をまねしようとしている。 ②話したいことを身振り手振りを交えて伝えようとしている。
d 異文化に興味・関心をもとうとしている。	①英語のもつアクセントや音に興味をもつ。 ②外国人の生活、習慣やしぐさに興味をもつ。

3　活動計画（全８時間計画）

過程	時	学習活動【見通し】		支援及び留意点	主な評価項目
つかむ	1	○学習の目的や内容を把握し、漢字を使ったゲームをする。 ・漢字アクトゲーム ・漢字リレーゲーム ○ALTの感想を聞く。	【見通し１】	・簡単な漢字を使って担任がＡＬＴに漢字を紹介し漢字を使ったゲームに着目できるようにする。 ・会話をしようとする姿勢を認める。 ・ＡＬＴに簡単な英語で身振りを交えて感想を話してもらう。また、漢字や日本の学校の学習について興味があることを話してもらう。	・集中して聞こうとしている。（b①） ・友達と楽しく活動している。（a①） ・恥ずかしがらずに話そうとしている。（a②）
	2	○自分のオリジナル漢字カードを作る。 ○漢字ゴーフィッシュをする。 ○オリジナルゲームを考える。		・自分の漢字カードについてＡＬＴに質問してもらい、児童の関心を高める機会とする。 ・ゲームが楽しく行えるようにわからない言葉を教えたり、自分たちのゲームを考えるヒントにしたりできるような支援をする。	・話したいことを伝えようとしている。（c②） ・外国のカード遊びに興味をもつ。（d②）
追究	3	○いろいろな運動の名称を知る。 ○運動に関する活動やゲームをする。 ・ヒューマングラフ ・プレイタグゲーム ・ジェスチャーゲーム	【見通	・ＡＬＴの説明後、ゲームのデモンストレーションを行い、児童が理解しやすいようにする。 ・聞こうとする態度、答えようとする態度を認め、児童の自信につなげるようにする。 ・ゲームをする中で、児童が英語を聞いたりＡＬＴに話しかけたりする機会をできるだけ多く作る。	・相手が言っていることを理解しようとしている。（b②） ・まちがいを気にせずに声を出している。（c①）
		○自分たちの学校の運動会をＡＬＴに紹介する		・グループで紹介したいものについて、前時に使った単語を思い出させ、身振り手振りを	・自分たちの話したいことを身ぶり手ぶり

す る	4	○ＡＬＴの国の運動や運動会について聞く。 ○ＡＬＴと一緒に運動会の競技を体験する。	し 2 】	交えての紹介でよいことを話す。要求に応じて英語を教える等の支援を行う。 ・実物や写真をＡＬＴに用意してもらい、実際にふれて見られるようにする。 ・児童と一緒に競技を楽しみ、英語で応援したり、号令をかけたり、自然な雰囲気で英語を聞いたり、話したりできるようにする。	を交えて伝えようとしている。(ａ③)(ｃ②) ・外国のスポーツに興味をもつ。(ｄ②) ・英語の持つ音やアクセントに興味をもつ。(ｄ①)
広 げ る	5 6	○交流会の計画を立て準備をする。 ・各グループで漢字のゲームやスポーツゲームの計画 ・係りの分担、交流会に必要な物の準備と練習		・グループを回って支援をし、英語がわからないときは身振り手振りを交えたり、日本語を使ったりしてもよいことを伝える。簡単な英語は興味・関心に応じて教える。 ・楽しい雰囲気のなかで交流できるようにグループ毎に場の設定をする。	・友達と協力して楽しく活動しようとしている。(ａ①) ・相手のことを考えて準備をしている。(ａ③)
	7 8	○地域の外国人（ゲストティーチャー）を招いて交流する。 ・英語での自己紹介 ・グループでの漢字のゲーム・スポーツ ・グループ対抗遊競技 ・ゲストティーチャーの感想	【見通し3】	・相手に話しかけることができたとき、質問に答えられたときを見逃さずに認める。 ・楽しい雰囲気の中で英語をたくさん聞き、会話をする機会がたくさんあるように、ゲストティーチャーに頼んでおく。 ・日本の運動会や学校のようす、自国の学校のようすについて相違にふれてもらう。楽しかったことを言葉や表情で伝えてもらい、これからの活動の励みとなるような支援をする。	・相手に伝わるように気をつけて話そうとしている。(ａ②) ・ゲストティーチャーと直接ふれあい会話をしようとしている。(ａ④) ・いろいろな国の人と交流し同じところや違いに気付く。(ｄ②)

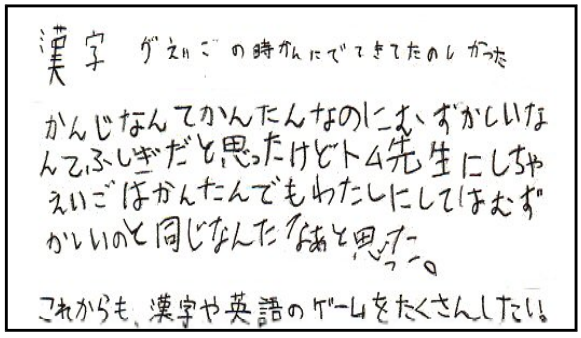
Ⅵ　研究の結果と考察

1　つかむ過程において、ゲームをしながら英会話に親しむ活動を漢字を使う学習と関連させて行うことは、相手の言おうとしていることをよく聞き、英語を話してみようとするために有効であったか

１、２時間目は漢字を使ったゲームで活動を進めた。１時間目は漢字の紹介、緊張をほぐす漢字アクトゲーム、何度も会話をする必要がある漢字リレーゲームを行った。リレーゲームは、児童の希望で何度も行った。最後にＡＬＴに漢字や授業についての感想を話してもらった。２時間目は児童がオリジナルの漢字カードを作りＡＬＴに紹介、ゲームでも活用した。

学級全体を見ると、今までの英会話活動ではゲーム自体は楽しんでいるが話すときは消極的で、特に女子には「みんなの前では恥ずかしいから大きな声を出さない」「英語がわからなくて自信がない」という雰囲気があった。今回の１、２時間目の活動では題材が漢字であったことから、親近感をもってゲームをしていた。また、楽しそうにゲームを行っていて、「自信がない」「言いたくない」という雰囲気が感じられなかった。担任やＡＬＴの話をよく聞きながら、男女ともよく声を出し、"Do you have ～?" "Yes, I do." "No, I don't."という会話を友達と何度も繰り返していた。ふり返りカードには「ゲームが楽しかった。」「英語でたくさん話せた。」「ＡＬＴの先生が言っていることがわかった。」という感想が多かった。また、資料１のよう

資料1　児童の授業の感想


漢字　ゲえいごの時かんにできてたのしかった

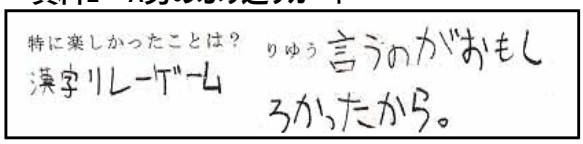
かんじなんてかんたんなのにむずかしいなんてふしぎだと思ったけどトム先生にしちゃえいごはかんたんでもわたしにしてはむずかしいのと同じなんだなあと思った。

これからも、漢字や英語のゲームをたくさんしたい。

に国語で学んだ漢字を授業に取り入れたことに関して「よかった」という感想も多かった。今年度から英会話活動に取り組み始めたところなので、同じような会話を必要に応じて繰り返すことで自信がついてきたようである。

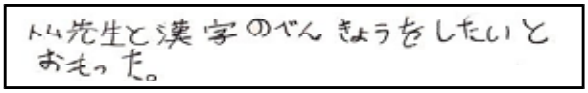
Ａ男は、今までの英会話活動ではどう言ってよいかわからず時間がかかったり、とても小さな声で言うことが多かった。この時間はＡ男が自信をもって会話ができるように練習する機会を設けたり、担任がそばで見守ったりしていたがＡＬＴや担任の話をよく聞き、自信をもって会話を楽しんでいた。ゲームの時には相手の言った言葉を聞き、"Do you have tree?" "Yes" と大きな声で答えていた。Ａ男はふり返りカードに資料２のように書いていて、活動を楽しみ、成就感をもったことがわかる。

資料2　A男のふり返りカード



Ｂ女は、いろいろなことを活発に行うことが多い。ところが英会話活動では消極的で、できることでも、自分から答えたり手を挙げたりすることが少なかった。これは英語に自信がないことと、女子全体のやや消極的な雰囲気が原因と考えられる。この時間は漢字のゲームで友だちに英語で何と言うかを教える場面も見られ、笑顔で"What's this?"や"It's a field." などと話していた。ゲームが楽しく周りの児童が活発に活動していたため、Ｂ女も自然にゲームに参加できたと考える。また、ＡＬＴが漢字に対して興味を示し「難しい。」と話したことを聞いて、消極的だったＡ女の感想が意欲的なものになった（資料３）。漢字を使ったゲームについては「とても楽しい。」ＡＬＴの話も「よく聞いていたらわかった。」とあった。

資料3　B女の感想



以上のことから、つかむ過程で漢字と関連させて英会話活動を行ったことは、児童の興味を引き、消極的だった児童もゲームを楽しみながら相手の言うことをよく聞き、英語を話してみようとするために有効であったと考える。

2　追究する過程において、ゲームをしながら英会話を楽しく体験する活動を体育で学習した活動と関連させて行うことは、体全体で表現する喜びを感じ、自分の話したいことを伝えようとするために有効であったか

３、４時間目にスポーツに関連するゲームや運動会で行ったゲームの紹介と体験をした。３時間目は、３つのゲームを通して運動に関する児童の関心を広げ、４時間目は運動会の種目を再現してＡＬＴに紹介した後、一緒にリレーやダンスを行った。

学級全体を見ると、体育は好んで行う教科であり、今まで以上に活動に積極的に取り組む姿勢が見られた。ヒューマングラフでは"What sport do you like?" "I like ～."と会話をしながら自分の好きなスポーツについてグラフを作った。プレイタグゲームではＡＬＴの話す"Walk" "Hop" "Clap 5 times"といった英語をよく聞いて思いきり体を動かし、元気に受け答えをしていた。ジェスチャーゲームでは、"I like ～."と言いながら問題を出し合ったが、表情豊かにジェスチャーをしたり、体全体で自分の言いたいことを表したりしていた。また、運動会の種目を紹介するために、自分たちで知っている英語の他に「始めるときは何というのか。」「最後は？」と自分の言いたいことを聞きに来て、休み時間に英語を使いながら紹介する種目を練習しているグループもあった。授業では、ＡＬＴにわかってもらおうと一生懸命覚えた英語で話し、足りないところはジェスチャーで補っていた。教わった英語で一緒に応援したり、スポーツを一緒に楽しんだりしながら、ＡＬＴにいろいろなことを伝えることができた。また、一緒にダンスをしたりリレーをしたりするうちに緊張もほぐれ、友達の様子を「恥ずかしがんないで堂々

とやっていた。」「がんばって表現できていた。」と書いており、児童の感想から少しずつ自信がついてきた様子が見てとれる（資料４）。

資料４　学級の児童の感想

ちょっとむずかしいけど、たのしいから、なれちゃえばへいきだと思いました。

Ａ男はプレイタグゲームでは、ＡＬＴの言う英語をよく聞いて、パートナーと夢中でゲームをしていた。運動会の種目ではダンスを紹介したが、紹介の言葉や、終わった後の感想をグループの友達と一緒に英語で話した。授業で習った言葉を友達と確認にきて、"This is our dance." "I'm tired." と言うことができた。３、４時間目とも、Ａ男は楽しかっただけでなく「たくさん英語で話せた。」と自己評価をしている。英語で十分な説明ができたわけではないが、普段静かなＡ男が身振りを交えて一生懸命説明する様子を見て、友達がＡ男の姿勢を資料５のように記述している。

資料5　児童のA男に対する感想

いっしょうけんめいカースティー先生にせつめいをしていた。

Ｂ女のグループは組み体操を紹介した。休み時間には自分から友達と組み体操の練習をしていたので声をかけたところ「楽しい。３つ紹介するんだ。」と答え、「クジャクはなんて言うのですか。」と質問をしてきた。授業では英語で何を作るか紹介しながら、９人の女子でピラミッドを作ったり、クジャクを作ったりした。このときＢ女は紹介する文を"This is a pyramid." "This is a peacock."と楽しそうに英語で言っていた。また、活動も自分たちで考えたとおりにでき、満足した様子が見て取れた。「とても楽しかった。」「たくさん話せた。」と自己評価をしている。Ｂ女の得意な体育の活動を見てもらうため、楽しく意欲的に取り組めたということがわかる（資料６）。

資料6　B女のふり返りカード

体でひょうげんしたりすると、なんとなくわかるようになった
体をみたいだったから

以上のことから、追究する過程で体育と関連させて英会話活動を行ったことは児童が意欲的に活動に取り組むきっかけとなり、英語を話す自信につながったと考える。さらに体育と関連させて体を動かしながらゲームをしたり、自分達の発表の紹介を考えたりするうちに自信がつき、体全体で表現する喜びを感じ、自分の話したいことを伝えようとするために有効であったと考える。

3　広げる過程において、今まで学習したことをもとに、地域の外国人やALTと漢字ゲームや運動などを交え楽しく交流する活動を行うことは、積極的にコミュニケーションを図ろうとするために有効であったか

７、８時間目に４人のゲストティーチャーと交流をした。４人はそれぞれちがう国から来ているが、英語を話す点は共通している。４人には各グループの一員として自己紹介やゲームを楽しんでもらった。また、児童にできるだけたくさん話しかけてもらうように頼んでおいた。

グループに一人のゲストティーチャーを迎えるという初めての体験で、児童に今までに見られなかった真剣さが感じられた。自分たちが中心となって交流するため、「これはなんて言うんですか。」「自己紹介の言い方をもう一度教えて。」と何度も英語での言い方を聞きに来た。日本語を使ってもよいと話してあったが、全員が何とか英語で話したいと考え、実際の交流でも、つかえたりまちがえたりしながらも、自分の言いたいことをわかってもらおうとしていた。また自己紹介では、名前や出身国、好きな食べ物やスポーツなど話してもらったが、話をよく聞いてかなり聞き取っていた。児童はゲストティーチャーと身近に話すチャンスが多くあり、授業のふり返りでは 30 名中 28 名がたくさん英語が話せ楽し

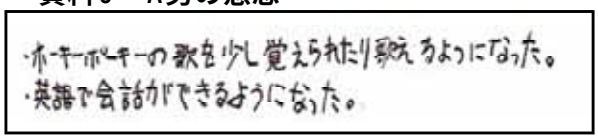
資料7　児童の授業の感想

英語の先生達と、いろいろな、ゲームで、あそべて、楽しかった。それに、まえより、英語がしゃべれるようになった。

かったと感じていた（資料７）。
残りの２名もまだ抵抗があるものの「前に比べ話す自信がついた。」「話してみると楽しい。」と答えている。

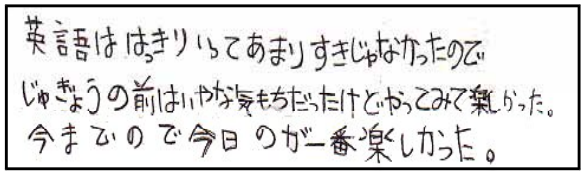
Ａ男はグループの司会者に立候補した。心配なときは担任に確かめながら、本番では"We play babanuki game." "Let's start."と話したり、英語の言い方がわからないときに"What's this?"と聞いたりできた。Ａ男のグループは漢字ババ抜きをしたが、２枚が合うと"School"や"Dog"のように英語で言ってから取るルールでで行っていた。Ａ男は今までより英語がわかるようになり、話す機会がたくさんあったことから自信がついてきたことがわかる（資料８）。

資料８　Ａ男の感想


・ホーキーポーキーの歌を少し覚えられたり歌えるようになった。
・英語で会話ができるようになった。

Ｂ女は少し抵抗もあったように見えたが、全体の司会に立候補した。"Good morning." "Let's sing a song!" "Thank you. "などの言葉を使い、友達と協力して司会をしていた。"I am ～." "I have ～." "I like ～ and ～."と何回も自己紹介の練習をし、本番でも大きな声で言うことができた。活動中も笑顔で、何度かゲストティーチャーと日本語やジェスチャーも含め会話をしていた。Ｂ女はふり返りカードに「話す自信がついた。」「前より英語が楽しい。」と自己評価をし、資料９のような感想を書いている。

資料９　Ｂ女の感想


英語ははっきりいってあまりすきじゃなかったので
じゅぎょうの前はいやな気もちだったけどやってみて楽しかった。
今までいのでいちばんのが一番楽しかった。

以上のことから、広げる過程において、今まで学習したことをもとに地域の外国人やＡＬＴと漢字ゲームや運動などを交え、楽しく交流する活動を行うことは、話してみようとする気持ちを生み、積極的にコミュニケーションを図ろうとするために有効であったと考える。

Ⅶ　研究のまとめと今後の課題

○　楽しいゲームを考え、ゲームをしながら何回も会話をしたり、紹介や体験をする活動を行ったりしたこととは、消極的だった児童の活動への意欲や英会話活動に対する自信を高め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する上で有効であった。

○　教科に関連させて英会話活動を行ったことは、題材に親しみをもっているため児童が意欲をもって活動に取り組むことができた点、楽しく会話をしながら自然に英語に親しむことができた点で有効であり、コミュニケーションの楽しさを英語を通じて味わうことができた。

○　今回は国語と体育を取り上げたが、他の教科では、形や簡単な計算をゲームに取り入れた算数との関連、英語の歌を取り入れた音楽との関連など、いろいろな題材での活動が考えられる。今後は他の教科と関連した題材にも広げていき、楽しくコミュニケーションができる活動をより系統立てて考えていく必要を感じた。また、国際理解学習に重点をおいて教科の内容を横断的・総合的に取り扱い、英会話活動のねらいを達成できるように検討していくことも課題である。

＜参考文献＞

・松川　禮子　編著　『小学校英語活動を創る』　高陵社書店(2003)
・金森　強　編著　『小学校の英語教育　指導者に求められる理論と実践』　教育出版(2003)
・渡邉　寛治　編集　『今日から始める小学校英語指導の基礎・基本』　教育開発研究所(2003)